

# 美術科教育学会通信 No.70

2009.2.20.発行

通信事務

〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1

愛知教育大学 創造科学系 美術教育講座内 美術科教育学会本部事務局

事務局 E-mail / bikiga@m.auecc.aichi-edu.ac.jp

藤江充(学会代表理事) - 研究室 TEL0566-26-2444

磯部洋司(事務局長) - 研究室 TEL0566-26-2447

樋口一成(広報担当) - 研究室 TEL0566-26-2449

三重大学 上山浩(Web担当) E-mail / ueyama@edu.mie-u.ac.jp

**第31回美術科教育学会佐賀大会の最終案内が佐賀大学から本部事務局に届きました。**

**佐賀大学から送っていただいた内容を下記に掲載させていただきます。**

## 第31回美術科教育学会佐賀大会のご案内【最終案内】

第31回大会の日程、主な内容、口頭発表等の詳細が決定しましたのでお知らせします。

1. 会 期：平成21年3月27日(金)・28日(土)・29日(日)
2. 会 場：佐賀大学本庄キャンパス教養教育機構棟2号館(研究発表)  
ホテルマリターレ創世(懇親会)
3. 大会テーマ：美術教育における継承と創造

美術系教科がわが国の公教育に導入されてから130年余になりますが、美術科教育学会も今回で31回を迎えたわけですから、発足当時生まれた人が30歳を越え、30歳だった人が60歳を越えたことになります。本学会も一定の歴史を経て、学会を成立させる三条件である、固有の研究目的、固有の研究対象、固有の研究方法に基づいて相応の美術教育の「文化」を形成してきたといえます。

したがって、今大会のテーマは、文化形成の二原理である「伝播」と「発生」に準え、美術教育における「継承」と「創造」をキーワードにいたしました。テーマには、本学会がこれまで蓄積してきた美術教育の財産を引き継ぎながら、さらに美術教育の創造をすべきであるという意味合いを含ませております。

本学会のこれまでの研究は、良く指摘されるように、理論研究に厚く、実践研究に薄かったといえるかと思いますが、美術教育実践研究の充実が美術科教育学会の一つの大きな課題であろうと考えます。たとえば、日本保育学会では4000人の会員がおり、毎年、2000人以上が学会に参加するという大規模な学会ですが、学会発表の大部分が実践研究で占められています。美術科教育学会においても、表現にしる、鑑賞にしる、今後はもっと実践研究を増やすべきではないでしょうか。

基礎美術教育(理論)研究は、もちろん重要ではありますが、美術教育が臨床の世界を扱う以上、臨床美術教育(実践)研究はもっと重要視されるべきでしょう。ただ、実践研究は、いまだ実証的検証方法が曖昧なままであるという事情があります。ある意味では、まだまだ若い学会ですから、今回、佐賀でそうしたことも含めて充実した討議が生まれることを期待しています。

#### 4. 日程

第1日		受付	開会行事	研究発表	理事会
3/27 (金)		12:00 ~	13:00~ 13:20	13:30~ 15:55	16:00~

第2日	受付	研究発表	昼食	研究発表	研究部会・東 西地区研究会	シンポジウム	懇親会
3/28 (土)	8:30~ 9:00	9:00~ 11:55		13:00~ 13:25	13:30~ 14:55	15:00~ 17:00	18:00~ 20:00

第3日	受付	研究発表	総会 閉会行事
3/29 (日)	8:30~ 9:00	9:00~ 11:25	11:30~ 12:30

#### 5. 主な内容

研究発表：50件の口頭発表を予定しています

研究部会：

\*「授業研究部会」：2008年度活動報告、口頭発表、討議

\*現代<A/E>部会：「現代<A/E>部会活動開始に向けて」

（現代<A/E>部会」は「拡張された<美術/教育>の基本構造と可能性を考えるための部会」の略称です）

東西地区研究会：地区研究会の活動内容の総括と討議

シンポジウム：3月28日（土）15:00~17:00 221番教室

《美術・工芸系の可能性 地域特有の人的・物的資源を生かして》

コーディネーター：菅生 均（熊本大学教授/木工芸・美術教育）

シンポジスト：小野康男（横浜国立大学教育人間科学部長/芸術学）

田中右紀（佐賀大学准教授/陶芸・造形作家）

永守基樹（和歌山大学教授/美術教育）

宮脇 理（元筑波大学教授・元佐賀大学教授/美術教育）（50音順、敬称略）

#### 6. 参加申し込み方法

(1) 学会参加費...4000円 懇親会費...5000円

(2) 参加申し込み最終期限：3月16日（月）

\* 参加申し込み及び参加費・懇親会費の払い込みは、同封の払込用紙に必要事項をご記入の上、

下記の大会事務局口座にお振込み下さい。 振込み用紙は、今回、同封してお送りしています。

口座番号：01720-5-68573

口座加入者名：第31回美術科教育学会佐賀大会事務局

通信欄に「学会参加費」「懇親会費」の納入該当項目欄に 印をご記入の上、ご住所・ご所属・お名前・電話番号等を明記下さい。

当日受付も可能ですが、大会運営上できるだけ事前にお申し込み下さい。なお、3月16日以降は口座に振り込まず、当日受付にてお支払い下さい。

## 7. 会場までのアクセス

【空路】 各地空港より福岡空港へ移動し、「福岡市営地下鉄（直結）とJR線（長崎・佐世保線）の乗り継ぎ」か「西鉄高速バス」（所要約70分）にてJR佐賀駅へ  
東京・羽田空港あるいは大阪・伊丹空港より有明佐賀空港へ移動し、アクセスバス（所要約35分）にてJR佐賀駅へ

【陸路】新幹線等でJR博多駅へ移動し、長崎・佐世保線特急（所要約35分）にてJR佐賀駅へ

【JR佐賀駅から佐賀大学への移動】

JR佐賀駅南口よりタクシーにて佐賀大学本庄キャンパス正門前へ

JR佐賀駅バスセンター「4番のりば」より「佐賀大学・相応線」「佐賀大学・東与賀線」に乗車し「佐大前（相応線）」か「佐大裏（東与賀線）」にて下車

（所要15分弱、ただし本数は非常に少ないため、のタクシー利用をおすすめします）

8. 宿泊先リスト 主なものを挙げております。  
各自で直接お申し込みください。

### 【佐賀駅周辺】

佐賀ワシントンホテルプラザ：0952-25-1111

ホテルルートイン佐賀駅前：0952-27-7115

サガシティホテル：0952-40-0100

第一栄城ホテル：0952-30-1121

東横イン佐賀駅前：0952-23-1045

グランデはがくれ：0952-25-2212

コンフォートホテル佐賀：0952-36-6312

ビジネスホテルサンシティ1号館：0952-31-8888

### 【佐賀大学周辺】

ホテルニューオータニ佐賀：0952-23-1111

若楠会館：0952-29-2233



## 9. 佐賀大会に関する問い合わせ先

〒840-8502 佐賀市本庄町1番地 佐賀大学文化教育学部教科教育講座内

第31回美術科教育学会佐賀大会事務局

大会実行委員長 前村 晃 (電話兼 Fax：0952-28-8336) ([maemuraa@cc.saga-u.ac.jp](mailto:maemuraa@cc.saga-u.ac.jp))

大会事務局長 栗山裕至 (電話兼 Fax：0952-28-8342) ([hiroshi@cc.saga-u.ac.jp](mailto:hiroshi@cc.saga-u.ac.jp))

# 第 31 回美術科教育学会佐賀大会 研究発表等一覧

第 1 日 3 月 27 日(金)午後

1200~	受付	
1300~1320		開会行事 C会場(221 番教室)

	A 会場(212 番教室)	B 会場(213 番教室)	C 会場(221 番教室)
1330~1355	ワークショップ「木をかこう」における幼児のイメージの広がりについて ㊦ 浅野卓司(桜花学園大)	我が国の構成教育に関する史的考察 ㊦ 藤原智也(岡山大院)	アートプロジェクトにおける帰属意識の再検討 岩井成昭 語りリストたちは午後夢をみるを手がかりに ㊦ 宮原ゆうき(千葉大院)
1400~1425	描画活動における保育者の支援に関する一考察 ㊦ 藤原逸樹(安田女子大)	明治期の幼稚園における手技の研究 名古屋市立第一幼稚園の保育案を中心に ㊦ 水野道子(東海学園大)	美術科教育における他律的要因の一考察 ㊦ 中村元隆(東京学芸大院)
1430~1455	乳児の造形あそびの中に見る自発的活動 ㊦ 村田夕紀(四天王寺大)	勝見勝の造形教育へのまなざし ㊦ 新聞伸也(滋賀大)	地域との連携によるものづくり教育活動の報告 ㊦ 藤田雅也(名古屋経済大短期大学部)他 3 名
1500~1525	光るどろだんごの基礎研究 ㊦ 半直哉(山陽学園幼児教育学科)	手工教育濫觴期の研究( ) ㊦ 宮坂元裕(帝京平成大)	thinking on the borderland: 拡張するアート、越境する学びの共同体をめぐって ㊦ 谷口幹也(九州女子大)
1530~1555	幼児の粘土造形 ㊦ 神谷睦代(成田国際福祉専門学校)		美術教育における新たな教科内容学の構築を目指して ㊦ 山本朝彦(鳴門教育大) 福本謹一(兵庫教育大学) 永守基樹(和歌山大学)

1600~	理事会 <222 番教室にて開催>	
-------	-------------------	--

第 2 日 3 月 28 日(土)午前

	A 会場(212 番教室)	B 会場(213 番教室)	C 会場(221 番教室)
9:00~9:25	「巻きこみ度数」からみる造形遊びの質的分類に関する研究 ㊦ 石賀直之(鶴見大短大部)	自己表現を育む絵画制作の指導 3 ㊦ 八木遼蒼(大阪府立三島高)	作品との関わり方としての鑑賞遊び 美術館における鑑賞支援の実践から ㊦ 竹内利夫(徳島県立近代美術館)
9:30~9:55	美術教育と「遊び」 山下暁子(東京学芸大連合院)	人物描画指導法の研究 ㊦ 武田佳恵(広島大)	「よさ」と「感動」の構造について 鑑賞支援活動の実践のなかから ㊦ 森芳功(徳島県立近代美術館)
10:00~10:25	口頭発表「高学年造形遊び不要論」への反論の問題点 ㊦ 吉田貴富(山口大)	言語活動を取り入れた版画の表現と鑑賞活動 ㊦ 山本敏子(徳島市加茂名南小)	美術館学芸員の立場から見た学校教育との連携の問題点と課題について ㊦ 仲田耕三(徳島県立近代美術館)
10:30~10:55	図画工作科の教科構造に関する一考察「造形遊び」導入以前の学習指導要領における内容構成の成立過程から ㊦ 大泉義一(横浜国大)	古典技法を応用した絵画制作 絵画をつくるという視点からの取り組み ㊦ 河塚 敦(福岡市立福岡西陵高)	鑑賞の授業研究 総合的な学習の時間を活用したパブリックアート鑑賞の実践から ㊦ 加藤真也(愛知県立大府養護学校)
11:00~11:25	実体験により育成される創造的な表現能力に関する一考察 ㊦ 牧野由理(武蔵工業大・東横学園女子短大兼)	主題表現法に基づく鑑賞及び評価能力の育成に関する考察 附属中学 2 年生における実践を通して ㊦ 立原慶一(宮城教育大)	美術館における つくこと の教育の実践 学校と美術館の連携の可能性を探る ㊦ 犬童昭久(熊本県立美術館) 楠本智郎(津奈木立づなぎ美術館)
11:30~11:55	交通事故遭遇児童の回復過程と自我形成期における諸問題 ㊦ 金澤貴子(宇都宮大院)	造形・図工活動における導入時のショート・エクササイズの開発と実践評価 ㊦ 山田一美(東京学芸大) 森尻有貴(お茶の水女子大院) 直井崇(慶應義塾大院)	鑑賞教材「地域から世界への視点」の実践授業の考察 ㊦ 蝦名敦子(弘前大)

第2日 3月28日(土)午後

	A会場(212番教室)	B会場(213番教室)	C会場(221番教室)
1300~1325	国際バカロレア MYP における美術科カリキュラム研究 ㊦ 小池研二(横浜国立大学)	造形ワークショップを通じたファッションライター体験 ㊦ 渡辺一洋(育英短大)	戦後の美術科教科書における掲載作品の研究「平和」に関連した掲載作品の考察 ㊦ 山口喜雄(宇都宮大)

1330~1355		現代 A/E 部会	授業研究部会
1400~1425		現代 A/E 部会	授業研究部会
1430~1455	東西地区研究会	現代 A/E 部会	授業研究部会

1500~1700			シンポジウム
-----------	--	--	--------

第3日 3月29日(日)午前

	A会場(212番教室)	B会場(213番教室)	C会場(221番教室)
9:00~9:25	図画工作・美術科教育の授業実践事例に関する研究 ㊦ 尾崎勇司(愛知教育大院)	描画課題における描画内容の日韓比較 ㊦ 新妻悦子(アトリエ・コン美術教育研究所)	美術科教育におけるデジタル機器の活用 ㊦ 姉川明子(佐賀市立巨勢小) 姉川正紀(中村学園大)
9:30~9:55		第32回 InSEA(国際美術教育学会)世界大会 2008in 大阪報告 ㊦ 宇田秀士(奈良教育大)	コラボレーションによる表現支援 高校生と教員によるデジタルコンテンツ共同制作の実践 ㊦ 中村隆敏(佐賀大)
10:00~10:25	美術教育ではぐくむ「能力」とは何か ㊦ ふじえみつる(愛知教育大)	アメリカにおける改革芸術学校ブラック・マウンテン・カレッジの芸術教育とその教育理念 小橋諒(神戸大院)	Z 絵本を使ったデジタル表現の可能性 ㊦ 木村典之(大分大附属中)
10:30~10:55	メディアとしての造形表現 衰退と反転に関する一考察 ㊦ 村松和彦(宇都宮大附属小)	戦後ベルリン造形芸術大学改革と演説原稿にみる初代学長 K・ホーファーの課題意識について 安部順子(神戸大院)	アートとテクノロジーによって考える力を育てるメディア教材の開発 ビコクリケット・ワークショップの実践を通して ㊦ 井上昌樹(群馬大院) 茂木一司(群馬大)
11:00~11:25	相互主体的な問い立ての試み ㊦ 立川泰史(東京学芸大附属小金井小)	戦前戦中アメリカ美術教育と慈善家 オワトナ美術教育とカーネギー教育振興財団の関わりを中心に ㊦ 大島賢一(東京学芸大院)	3DCG にみる知覚の流動モデルと表現の指導法 ㊦ 上山浩(三重大)
11:30~12:30			総会 閉会行事

㊦はプロジェクター ㊧は VHS ビデオ

# 報 告

## 東地区会の報告

美術科教育学会 2008 年度  
第 2・第 3 回東地区会 報告

< ツウィン・フォーラム 1 >

【テーマ】「キーワードから見ひらく 2010 年代の  
ヴィジョンと実践 新学習指導要領解  
説『図画工作編』をもとに」

【日 時】2008 年（平成 20 年）11 月 29 日（土）

【会 場】東京学芸大学附属竹早中学校（東京都  
文京区）

< 話題提供者 >

直井 崇（玉川学園小学部造形科非常勤講師 /  
東京都）、高松智行（横浜国立大学附属鎌倉小学  
校教諭 / 神奈川県）、栗城敦志（加須市立加須（か  
ぞ）小学校教諭 / 埼玉県）、皆川ひろ子（筑西市立  
中小学校教諭 / 茨城県）、高野 敏（所沢市立林  
小学校教諭 / 埼玉県）、平田耕介（墨田区立押上  
小学校教諭 / 東京都）

< コメンテーター >

三澤一実（武蔵野美術大学教授）  
大泉義一（横浜国立大学准教授）  
岡田京子（東京都町田市立町田第四小学校教諭）

\* \* \* \* \*

< ツウィン・フォーラム 2 >

【テーマ】「キーワードから見ひらく 2010 年代の  
ヴィジョンと実践 新学習指導要領解  
説『美術編』をもとに」

【日 時】2008 年（平成 20 年）12 月 7 日（日）

【会 場】東京学芸大学附属竹早中学校

< 開会挨拶 > 宮脇 理（担当理事）

< 話題提供者 >

石川清子（宮代町立前原中学校教諭 / 埼玉県）、  
正田真由美（さいたま市立木崎中学校教諭 / 埼

玉県）、嶽里永子（東京学芸大学附属国際中等教  
育学校教諭 / 東京都）、大山文子（鴻巣市立鴻巣  
南中学校教諭 / 埼玉県）、山田一文（埼玉大学附  
属中学校教諭 / 埼玉県）、中村みどり（世田谷区  
立尾山台中学校主幹教諭 / 東京都）、丸山圭子  
（川崎市立南加瀬中学校教諭 / 神奈川県）

< コメンテーター >

水島尚喜（聖心女子大学教授）  
小野範子（神奈川県教育委員会指導主事）  
三澤一実（武蔵野美術大学教授）

\* \* \* \* \*

### 1. フォーラムの持ち方

これまでのフォーラム形式を一部改め、話題提  
供者を公募し、ショート発表を行った。テーマは、  
参加者が共有しやすいもの、関心の高いものを考  
慮し、新学習指導要領の小・中解説編のなかから  
「キーワード」を取り出し話題提供していただい  
た。さらにそれに対して複数のコメンテーターが  
加わり、意見や考えを述べるなどして交流を深め、  
2010 年代の図画工作・美術の理念や実践の在り方  
を展望しようとした。

### 2. 話題提供者とコメンテーター

話題提供者の公募に対して自薦・推薦を含め予  
想以上に応募が集まった。その話題提供とコメン  
テーター役をかってくださった先生方は左記のと  
おりである。募集中、コメンテーター役の先生方  
には話題として取り上げてほしい視点や糸口、期  
待したいキーワードを示してもらい、チラシやホ  
ームページで呼びかけた。

例えば、岡田先生は「形や色などによるコミュ  
ニケーション」や「授業中の子どもの姿」を、三  
澤先生は日々の授業のなかでの無理のない図画工  
作科の言語活動を、小野先生は自分なりの意味や  
価値をつくりだす創造活動の視点から鑑賞学習と  
対話の在り方を、水島先生は共通事項を巡る様々  
な疑問点や課題点を指摘して公募に協力いただい  
た。

### 3. 話題提供の概要

発表は、一人10分と短く、コメントを含めディスカッションも10分に制限されたため、話題提供者の方々には窮屈感を否めなかったものと、企画者の一人として反省している。以下、それぞれの内容について簡単に触れておこう。

#### < ツウィン・フォーラム1 > の話題提供

直井崇先生は、「コミュニケーション」「形」「鑑賞」をキーワードとして授業実践を二つ紹介した。一つは社会科との連携授業として事前に社会科で縄文土器について学び、その後、学園敷地内から採取した土から粘土を作り縄文土器を制作する授業である。二つ目は鑑賞授業。始めの10分を活用し、人物画の作品（モナリザ等）を見せ、その人物がどのような人で何を考えているかを発言してもらう授業である。

高松智行先生は、「自らつくりだす喜び」とは何かを問い、戦没画学生慰霊美術館「無言館」の学習から卒業制作（アクリル画）に取り組む子ども達の姿を紹介した。

栗城敦志先生は、「つたえ合い、響き合い、地域社会とともに」をテーマにした実践を紹介した。この実践は、子どもたちが遊び、親子で買い物をする加須の街中での取組であり、加須小学校の成果の一つ、「加須小まちかえど美術館」と題名された。「つたえたい」思いを強く持ち、思考力・創造性・表現力を高めていく視点から、作者（子ども）・保護者・地域が響き合う姿と、地域社会を巻き込んだダイナミックな学びである。



皆川ひろ子先生は、「自分のイメージ」と言語活動の視点から、第6学年「光を包む」の実践を紹介した。光を包む方法のイメージをもたせたうえで、紙や針金、割りばしを使ったランプシェードをつくった実践である。自分の感じたことや考えたこと、自分がとらえた形や色、心に思い浮かんだイメージなどを具体化する図画工作の言語活動の提案となっていた。

高野敏先生には、言語活動と自己評価の充実（言語活動）に取り組んだ実践について、ご自身の記録をもとに紹介していただいた。

平田耕介先生の紹介は、「えがくとことばをつなぐもの」をテーマに、子どもが思ったこと、感じたことを形や色で表現し、個々に気づいたり新しい自分に出会ったりする図工の時間についてである。「言葉」というキーワードを交えた表現と鑑賞の実践からそうした豊かさを実感できる発表であった。

#### < ツウィン・フォーラム2 > の話題提供

石川清子先生は、「ゆたかな素材との出会い」をテーマに変容の急な中学生の姿を、美術を通して多面から紹介した。

正田真由美先生は、「柔軟な発想力と価値・材料で表す技能の協働」「色・形・材料などから性質や感情、イメージなどを豊かに感じ取る力の育成」と、「共通事項」を視野に幅広く実像を紹介していた。

嶽里永子先生は、国際バカロレア機構のMYPを意識し、「発想や構想の能力」と「表現する技能」の育成について話題を提供してくれた。

大山文子先生は、「他者との対話から学ぶ鑑賞学習」をテーマに、五重塔の再建者の宮大工「小川三夫さん」の講演とからめて実践報告をした。

山田一文先生は、鑑賞活動のまとめ方についての実践事例を紹介しつつ、「作品などに対する自分の価値意識をもって批評し合う」などの活動について、その「まとめ方」にピンポイントで迫り、2年生の授業「じっくり、どっぷりファン・エイク」



を例に鑑賞活動の在り方を提案した。

中村みどり先生の提案は、「素材とのゆたかなかわり」を子どもたちが五感を通して深めていく様子と実践の方法についてである。

丸山圭子先生は、映像メディアの活用に着目し、活動の振り返りと次の活動に生かす働きかけとして、五感のはたらきを意識化させる手立てとして、イメージして物語をつくり自分なりの意味や価値をつくる活動として、その成果を発表した。



#### 4. ために代えて

コメンテーターの指摘とやりとりは、今回のフォーラムのテーマである学習指導要領のキーワードを越え、多様に広がり、とても刺激的であった。これらを含め、今後、概要を小冊子にまとめ配布できるよう計画である。以上、成果の羅列であったが、本フォーラムが参加者の交流を糸口に実践と理論をつなぎ、2010年代につながる学び合いが少しでも共有されたものであったことを願っている。

(報告：山田一美)

## 西地区会の報告

美術科教育学会 2008 年度

4 回西地区研究会報告

テーマ：創造を生涯の友にする「鑑賞遊び」

日時：2008 年 11 月 15 日 [土] 13:30-16:40

会場：徳島県立近代美術館（講座室）

主催：美術科教育学会、徳島県立近代美術館

後援：徳島県小学校教育研究会図画工作部会、  
徳島県中学校教育研究会美術部会

参加者：49 名

### 1 概要

研究発表 13:30-14:45

I 「パスポート力を涵養する鑑賞遊び」

濱口由美（徳島市富田小学校）

II 「鑑賞パスポートを手にした子どもたち」

濱口由美・竹内利夫（徳島県立近代美術館）

パネルディスカッション 14:55-17:00

「鑑賞遊び」の習得・活用・探求 - 図工室から生涯美術へ -

パネリスト：赤木里香子（岡山大学教育学部）/  
森芳功（徳島県立近代美術館）/  
山本朝彦（鳴門教育大学）/  
山田芳明（鳴門教育大学）/  
結城栄子（徳島県立総合教育センター）<五十音順>

司会：濱口由美 / 竹内利夫

### 2 研究発表・鑑賞シート授業研究会

「創造を生涯の友にする『鑑賞遊び』」とのテーマを掲げ、新しい教育課程における学習指導の具現的な方法論として、生涯の鑑賞パスポート力を涵養していく「鑑賞遊び」について考察した実践研究の発表を行った。また、たくさんの方が、鑑賞遊びの様々な実践を知ることによって検証的視野から研究会討議に参加できるようにと願い「第5回鑑賞シート授業研究会」も同日開催した。

#### (1) 研究発表

今回の研究発表では、改訂学習指導要領の基本



方針でもある「習得・活用・探求」の学習指導の視点から、これまでの美術作品を対象とした鑑賞遊びにかかわる実践活動を捉え直すことで、「鑑賞遊び」が新しい教育課程における具現的な鑑賞プログラムとして様々な可能性を持つことを示した。また、生涯美術への素地を育む鑑賞活動としての「鑑賞遊び」のスタンスを表明することで、2部のパネルディスカッションへの問題提起とした。

研究発表は、鑑賞遊び「音のかくれんぼ」を軸とした授業記録を基に、「習得」から「活用」へと連動していく過程での子どもたちの変容を分析しながら活動の様子を報告した。そして、鑑賞遊びのルールの習得が、自立的な活動へと展開していくための「作品や友達とかかわる力」となることを検証した。また、このルールを伴う鑑賞遊びの学習スタイルが、一人一人の確かな居場所と互いを認め合う相互鑑賞の場をつくりだす要因であることも多学年にわたる事例研究を基に報告した。

研究発表では、美術館での「クレアの絵本朗読会」や「夏休み親子シーがる・た大会」、地域の文化財を会場とした来場者参加の「富田の町でシーがる・た」展など、鑑賞遊びを活用することで探求的な活動の場が生まれた二つの合科的単元学習の実践を報告した。美術館を舞台とした鑑賞遊びの活動は、様々な人との交流を生み出し、色や形などによるコミュニケーションを通して社会とかかわろうとする態度を育む。そして、鑑賞遊びの活動を、学校生活・美術館・地域社会の中で活用していくことで、個々の探求的な活動がひろがり、生涯鑑賞パスポート力の確かな素地が一人一人に培われてくるものであるとまとめた。また、竹内学芸員からは学校教育の支援活動として活用した美術館での取り組みが報告され、社会教育の場における「鑑賞遊び」の汎用性や有用性が子どもたちの活動の足跡から示された。

## (2)第5回鑑賞シート授業研究会

鑑賞シートを活用した実践開発とそのネットワーク確立のために集まった塾生（ほとんどが小学校教員）による、自主的な研究会を平成18年から続けている。今回は、鑑賞シート No. 7「吹田文明

の色と光」の実践報告である。

1時間目は、脇本正久教諭の5年生児童による「音のかくれんぼ」の実践報告。子どもたちの評価活動を鑑賞遊びの活動に組み込むことで、相互鑑賞の場がより意欲的な活動となることや批評的な見方も高まることを提言された。

2時間目は、それぞれの学校で実践された「音のかくれんぼ」の輪番制フリートーク。鑑賞遊び「音のかくれんぼ」を軸にしながらも、対象学年や学校の取り組みに合わせた個性的・創造的なシート活用実践が報告された。国語科の学習と合科的に展開した実践や美術館のWeb番組を活用した指導者たちは、「言語活動の充実」や「放送・視聴覚教育」といったそれぞれの学校における研究テーマを駆使したものであった。また、参観日という特別な日を活用することで保護者を巻き込んだ授業、校長先生所有の吹田作品を活用した実物鑑賞など様々な人との関わりや協力を得ることでより豊かな活動を展開させていった実践報告もあった。

このような実践報告から、「鑑賞遊び」が個を尊重し他者との豊かな交流の場を生み出すことのできる活動であることを確認するとともに、活動する子らの見方や考えに寄り添う教師の思いがその基盤を創り出すことなどを一層認識させられた。また、同一の鑑賞シートをフレキシブルに活用していく現場の教師力のなかに、これからの展望と機動力が存在することを実感させられた研究会ともなった。

## 3 パネルディスカッション

指導要領改訂の要点の一つである「習得・活用」をキーワードとして現場教員と課題を共有することと、自分たちの鑑賞遊びの検証を、重ね合わせることが本研究会のねらいであった。そこで総覧型ではなく、発表を基点とする求心型のパネルディスカッションを設定した。濱口発表の根底にある生涯美術というコンセプトから、「図工室から生涯美術へ」と討議の流れを考え、またリレー発表の形ではなくフリートークで率直な関心を交換することにした。

### (1)授業実践としての評価

山田：まず午前の授業研究会の話題から。題材は教師の力量や授業像と一体化して初めて成立する。研究会は実践を交流しており共感を覚えた。鑑賞シートが一人歩きに終わらず、フィードバックできるコミュニティを作ることを期待する。

赤木：岡山県立美術館の10数年にわたる学校連携においても、開発と普及の後の検証が直面する課題である。徳島とも交流したい。同じように見えながら異なる実践を生んでいる鑑賞シートの汎用性を検証されたい。

司会（竹内）：濱口発表は、習得活用探求をテーマとするが、そこには教師の支援が後退していくという事柄も含まれているが。

山田：造形遊びではその年代の子どもたちが何を楽しむのかを重視するのだが、濱口さんの鑑賞遊びにも同じ印象を受ける。ただ、題材のポイントを探れないと難しい面もあり、ルールの柔軟性を高めても良いのでは。また、年齢に応じて高まっていく側面、系統性といった点はどうか。低学年から継続していった結果を期待する。

【まとめ】 即効性のある配布教材として開発を始めた鑑賞シートであったが、授業研究と交流の実践面をこそ評価された。どの子どもが参加できるようにという鑑賞遊びの特性については、さらに学年を通した系統性や教科の中での位置づけを研究するよう提言を頂いた。

### (2)教科としての見直し

結城：鑑賞教材の収集が教員の悩みであるという調査結果があり、鑑賞シートの果たす役割は大きい。吉野川市ブレ大会における学校の蔵品を活かした例を見ても、普段の鑑賞環境の大切さを実感する。

鑑賞遊びは、自分の中に新しい価値を作り出す創造活動であり、知識詰め込みでなく、心が働いて知性と一体化する学び。持てる力を活用するという点で、改訂の時宜を得た研究。異なる学年で入口は同じでも良いと個人的には思う。学年により高まっていく内容が、授業と評価のポイントで

あり、鑑賞シート「指導の手引き」においても研究している。

赤木：国吉康雄の教材開発では、学年に応じ活用の力がレベルアップしていくことを考えた。アートゲームなど方法は色々あるが、小学校から中学校まで共通事項的な柱はあるはず。

司会：国吉実践にある対話型鑑賞を、習得活用という面から見ると。

赤木：作品に戻る対話型においても重要。対話型にも、濱口発表での相互鑑賞に近い利点がある。作家・技法・歴史なども含めた議論を積極的に取り入れている。他教科での蓄積を活用できる場面が、高学年や中学生には必要。

【まとめ】 教師の役割像、授業像がまた異なる、対話を取り入れた鑑賞との共通点や、学年による高まりを意識した実践との比較から、研究の視点を頂いた。

### (3)生涯美術 - 美術批評、美術館活動との接点から

山木：鑑賞遊び、濱口授業の魅力は、どの人もアートに息吹をふきこむ運動の要素があること。アートを社会に浸透させることこそ美術教育の目的ではないか。知的な情報の取捨選択や評価には柔軟な心が必要であり、多様な見方を尊重する学びが理想。DBAEとも共通するのは、言葉による表現がときには教科の枠を越える。

大局的に見ても、海外から来たものではなく、地域をみずえた教師の立場からのユニークな鑑賞教育であり、新指導要領で求められる批評など鑑賞の指導の本道を行っている。皆さんも実際にやってみてほしいし、シーガルブログでのフィードバックもご覧いただきたい。

森：学校の習得活用と同じような実践が館にもあることをお伝えしたい。全ての子に鑑賞を楽しめる体験をさせることが目標。分析的な観察の他に、表現的に鑑賞する方法があるが、自分と作品を結びつけるために大切。それらを交流する活動は、鑑賞の本来の機能と言える。最近では学習後、手がかりを持って来館するケースも増えており、先生方と研究を深めたい。

主体性とは多義的である。内面の問題とコミュニケーションの双方から見ていきたい。鑑賞遊びが一人一人を大切にしている点に注目する。

【まとめ】 後盤、共同研究メンバーお二人からの話題提供をもって、研究の地盤、視野を再確認できた。日ごろはタスク実行型の会合の中で、ともすれば完成形を急ぐあまりメンバー同士の深い問題意識から息を合わせていくことがおざなりになる面もあったことを痛感させられた。

会場の奥村高明教科調査官からは発表テーマの習得・活用・探求について、また鑑賞遊びの概念規定について鋭い批評が示された。特に、学習指導要領における「習得」と鑑賞遊びの「習得」と捉え方の差異の指摘は、今後のまとめ方についての示唆となるものであった。また、草の根的な立場で行ってきた鑑賞シート授業研究会の本質を私たち以上に見抜きこの活動の意義を唱えてくださったことは、これからの活動への大切なエールにしていきたい。東京学芸大学の山田一美先生からも、五感を活用した鑑賞活動や教師が手作りで行う作業の魅力についての意見を賜った。

「鑑賞遊び」の報告により、鑑賞者の個を活かすことと、授業の普及の便を備えた両刃の「ルール」を主張したところ、実はルールを肉体化してきた実践の活動力と魅力が評価されたように感じました。実践を広めることに心血を注いできた企画者らの本意が励まされたことであり、研究会の機会を与えてくださったことに心から感謝します。

(報告：濱口由美 / 竹内利夫)

## 事務局からのお知らせ

### 「会員名簿」の刊行について

「学会通信No.69」にてお知らせしましたように、この度、学会の会員名簿を作成しましたので、本学会通信と一緒に送らせていただきました。

会員名簿の中にも記載させていただいておりますが、下記の点について確認をお願い致します。

- ・12月末日現在で会員資格のある会員を掲載しました。
- ・学会通信No.69でお知らせした項目を掲載しました。
- ・先に返送していただいた会員名簿確認表の内容に沿って作成させていただきました。
- ・会員名簿確認表等で非公開であるとお知らせいただいた項目については、印を付けさせていただきました。
- ・会員名簿確認表をご返送いただけなかった会員の方々の名簿内容は、本部事務局にある会員名簿のデータをそのまま使わせていただきました。
- ・郵便物が住所不明で戻ってきている会員の住所は、空欄にさせていただきました。

- ・しばらく会員名簿がなかったことから、過去の会員名簿に比べて十分でない部分があります。所属・連絡先などの間違いは、お手数ですが、できるだけ早急に本部事務局までメールにてお知らせください。

E-mail / bikiga@m.auecc.aichi-edu.ac.jp

## 研究ノート

### 再評価される上野リチの教育実践

山野てるひ（京都女子大学短期大学部教授）

今年1月から2月にかけて、京都国立近代美術館で「上野伊三郎+リチコレクション ウィーンから京都へ、建築から工芸へ」と題した展覧会が開催された。建築家・上野伊三郎とウィーンで結婚し、その後、ともに京都で活動した上野リチ（Ferice “ILizzi” Ueno-Rix, 1893-1967）については、筆者が勤務する京都女子大学構内に隣接した村野藤吾設計の中林邸・比燕荘で、1987年に「リチ・上野=リックス展」が開かれたことがある。

しかし、晩年に京都市立美術大学（現市立芸術大学）工芸科教授に就任して、夫妻そろって教育に携わり、現在も活躍する数多くの作家や教育者を育てた上野リチの「教育実践」は、注目すべき側面でありながら、これまでほとんど語られてはこなかった。

けれども、冒頭に紹介した展覧会によって、ようやく造形作家としての活動とともに、その特徴ある「教育実践」にも光があてられ、再評価の気運も高まってきたと思われる。ここでは、この上野リチの教育指導の内容を俎上に載せ、今後の研究への端緒としたい。

#### 1. 造形作家から教育者へ：

リチは、オーストリアのウィーンに生まれた。幼いころから自然や動物に親しみ、20歳のときにウィーン工芸学校に入学して、ヨーゼフ・ホフ

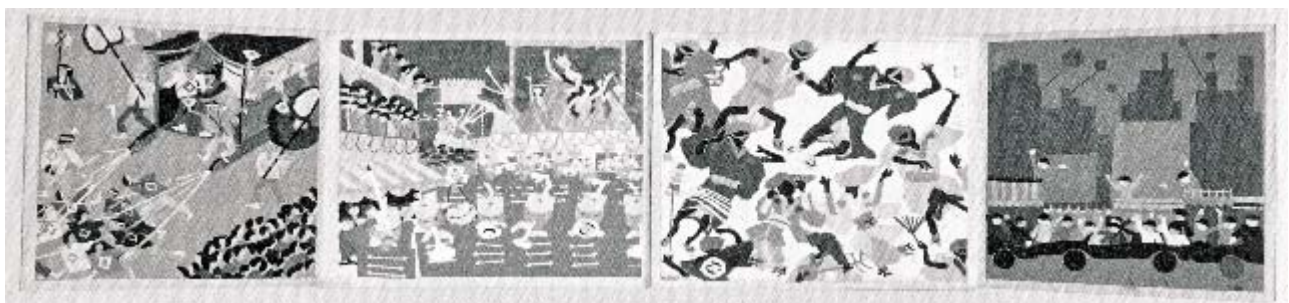
マンの薫陶を得る。同校を卒業するとすぐに、同じくホフマン主宰のウィーン工房に入り、テキスタイルやガラスなどの工芸製品の制作に従事していく。とりわけプリント図案は、「リックス文様」と呼ばれ、高い評価を得て、パリやニューヨークなどへも輸出されたという。そして、ウィーン工房時代に、同じくホフマンの建築事務所で働いていた上野伊三郎と結ばれたのである。結婚の翌年（1926年）夫妻そろって来日し、京都を拠点に、リチも新たな活動を開始していった。

彼女は、夫・伊三郎が帰国後すぐに開いた建築事務所で主にインテリア関係の衣装図案を担当し、住宅や店舗などの内装を共同で手掛ける。しかし残念ながら、これらの仕事の成果が示された実例は、現在ではまったく失われてしまっている。ただ、当時の建築写真からは、リチのウィーンで花開いた感性が、そのまま京都に伝えられているような様子が活写されて、興味深い。

そして上野夫妻の手元には、ウィーン時代に制作された壁紙やプリント図案が大切に保管され、それらが、現在は「上野伊三郎・リチコレクション」として、京都国立近代美術館に一括収蔵されているのである。

ところで「上野伊三郎+リチコレクション」展には、「参考出品」として、当時の京都市立美術大学生の手になる「上野リチ指導『色彩構成』集団制作」（以下「指導作品」）という資料（挿図）が展示されていた。筆者はここで、特にこの資料に注目してみたい。

「指導作品」は、蛇腹形式の連続した見開きの「画帖」に複数の学生作品が集められたものである。それらは色紙による「ちぎり絵」の技法によって、「祭り」や「オペラのコスチューム」などを主題に制作されている。1961年に、当時同大学の1回生が上野リチ指導のもとに制作し、京都



市美術館でも展示されたという。この「指導作品」は、現在は京都市立芸術大学デザイン研究室の所蔵となっている。

1961年といえば、上野伊三郎・リチが美大を定年退任する2年前のことで、ともに工芸科の教授職にあり、助手には後に染織家となる中井貞次氏や、京都市内の橋のデザインなどで知られる田坪良次氏などがいた。そして、上野リチの退任とともに、その後を引き継ぐかのようにして助手となった鈴木佳子氏の回想によれば、上野リチの「授業の内容は“色彩構成”に代表」\*1)されるといい、この「指導作品」が、その「教育実践」内容を今に伝える、唯一残された資料なのである。

## 2. 上野リチの「教育実践」

「色彩構成」とは、“Farbe und Komposition” \*2)の翻訳だが、上野伊三郎とともに「インターナショナル建築会」で中心的役割をなしていた伊藤正文は、『色彩構成と近代工芸』という小冊子で次のように記している。すなわち「色彩構成」という言葉は、「在来の色紙細工や、貼絵と混同され易く、誤り伝えられ」、「『パピエ・コレ』といわれる純粹絵画としての作画の立場から、工芸的な色彩構成の作品を批判されると、立場と意図の相違から誤った判断」を下されてしまいがちだと指摘する\*3)。

そして、「吾々の扱う色彩構成は、それがそのまま芸術作品ではないのであって、工芸意匠全般に渉る色調と形態との構想を表す一手段であるといえる。だからたとえ作品そのままが、額面画としての効果をもつものとしても、元来それを目的で作られたものではない。近年マチスやピカソ、或いはブラック等立体主義系統の画家によって発表される貼紙とは、制作の目的がちがう点に、はっきり区別をつけて置きたい」\*4)と、伊藤は続けているのである。

この小冊子は、本文末尾に「一九四九年七月、記」と記されているように、上野リチが美術大学で教鞭を執りはじめる1951年以前に執筆されたものである。伊藤のこの小冊子を紹介しながら、

なぜここで上野リチについて触れるかといえば、実は伊藤が、「二十年前ウィーン工房の意匠部員であったリッチ夫人直接の指導をうけている処もある」\*3)としているからである。ここから、リチが美大に着任する前に、伊三郎とともに指導した摂南工業専門学校（現大阪工業大学）でも、すでに「色彩構成」を課していたことがわかる。

美術大学で身近に上野リチの指導を受けた鈴木佳子氏は、「色彩構成は、ウィーンにおけるフランツ・チゼックの教育から発展させた」\*5)もので、幼児や児童の美術教育の開拓者であるチゼックの「教育実践」に、その源を求めている。

「その新しい授業方法は子供の想像力と芸術的な自発性に活動の余地を与え、(中略)装飾文様及び平面美術との取り組みなど」があったと指摘する\*6)。チゼックのウィーン美術工芸学校における「青少年美術教室」の教育はよく知られているが、ここで試みられ多くの成果をあげていた「紙の切り絵・はり絵」の教育実践からリチは大きな影響を受けていたものと考えられる。

このことは、先にも触れた伊藤正文の「色彩構成は、それがそのまま芸術作品ではないのであって、工芸意匠全般に渉る色調と形態との構想を表す一手段である」という文言と共鳴するだろう。ここでリチの理想とする「教育実践」は、専門家を養成する高等教育においても、はじめから「芸術作品」の創造を目指すといった、いわば上段からの「構え」ではなく、幼児や児童と向き合うように、「想像力」と「自発性」を育む指導法に重心がおかれているのである。

それは、上野リチの造形のキーワードともなる「ファンタジー」という言葉とも関連する。そしてこれはとりもおさず、チゼックの教育におけるキーワードでもある。私たちはこの「ファンタジー」という言葉の響きから、一般に「何か空想的で幻想的なもの＝おとぎばなし的なもの」と解釈してしまいがちである。しかしリチは、日本の美術学校でも支配的だった写実や再現描写に対して、たとえば、それこそ幼児や児童のように現実のイメージを超える素直な表現を「ファンタジー」と呼ぶのである。

## 事務局からのお知らせ

2008年度新入会員（2009年1月末日現在）

廣川政和(印旛村立印旛中学校教諭)・那須賢輔(三重県立美術館非常勤嘱託員)・椎名澄子(北翔大学短期大学部非常勤講師)・岡山万里(財団法人大原美術館学芸員)・小田切武(山梨大学教育人間科学部附属中学校教諭)・浅野恵治(東京都立工芸高等学校教諭)・佐々有生(島根大学教授)・水野道子(東海学園大学講師)・安藤郁子(陶芸家)・池田香織(東京学芸大学大学院生)・前田豊稔(甲南女子大学准教授)・小口あや(土浦市立大岩田小学校教諭)・井上朋子(兵庫教育大学大学院生)・葉山登(川村学園女子大学准教授)・五十嵐史帆(広島大学准教授)・藤田知里(就実大学講師)・渡部晃子(筑波大学大学院生)・牧野由理(武蔵工業大学所助教)・渡邊美香(筑波大学大学院生)・伊藤龍豪(横浜国立大学教育人間科学部附属横浜小学校教諭)・市川博登(東広島市八本木小学校教諭)・藤原智也(岡山大学教育学部附属中学校非常勤講師)・武居美緒(信州大学大学院生)・西本好男(姫路市立東光中学校教諭)・浅海真弓(兵庫教育大学講師)・縣拓充(東京大学大学院生)・中原直人(山野美容芸術短期大学講師)・上浦千津子(IPU環太平洋大学講師)・王寺直子(あかさかルンビニー園園長)・赤木睦代(城陽市立東城陽中学校教諭)・村上タカシ(宮城教育大学准教授)・澤京子(東大阪市立枚岡中学校教諭)・清田哲男(兵庫県立香寺高等学校教諭)・小橋諒(神戸大学大学院生)・宮原ゆうき(千葉大学大学院生)・吉村壮明(沖縄キリスト教短期大学准教授)・加藤克俊(愛知学泉大学非常勤講師)・直井崇(玉川学園K-12(小学部)非常勤講師)・姉川明子(佐賀市立巨勢小学校講師)・片山ゆう子(佐賀大学大学院生)・青木善治(三条市立月岡小学校教諭)・柴崎裕(多摩市立多摩第三小学校教諭)・嶽里永子(東京学芸大学附属国際中等教育学校教諭)

2008年度に退会された方々（2009年1月末日現在）

梶田幸恵・新島久美・森秀雄・阿部由実子・喜瀬泰江・中川織江・園田賢志

前述の「指導作品」に目を向けてみると、テーマは、「祭り」や「オペラのコスチューム」といった日常とは異なる場面が与えられている。そこで、リチはかたくななまでに「色彩構成」を、絵の具ではなく色紙を用いておこなった。しかも全てが決まる最後まで糊付けをさせなかったという。色紙を自由に切ったり、ちぎったりすることは、「色彩」や「かたち」とともに、それが貼りつけられる「空間」が強く意識される。簡単に糊付けせず、「色彩」と「形態」、そして「空間」の関係を徹底的に追及させることは、写実的な描写の方法では到達できない、空間を秩序化するという最も重要な造形能力を目覚めさせるものであった。

リチをとおして、チゼックの教育精神の一端は、60年前にオーストリアから京都という地に運ばれ育まれていた。そしてリチは、自らの「造形作家」としての実績を糧に、それを「教育実践」に大胆に応用できた数少ない作家だったと思われる。

### 引用文献：

\* 1、\* 2、\* 5、\* 6)：

鈴木佳子「京都市立美術大学における上野伊三郎先生、リチ先生の指導について」『上野伊三郎+リチコレクション』展図録(京都国立近代美術館、2009年)所収。

\* 3、\* 4)：伊藤正文『色彩構成と近代工芸』(池坊華務課編集部編集、日本華道社、1949年)所収。

### 参考文献：

石崎和宏『フランツ・チゼックの美術教育論とその方法に関する研究』(建帛社、1992年)